

*Adventures of Huckleberry Finn*における「流れ」と「円環」

Stream and Circle in *Adventures of Huckleberry Finn*

江 頭 理 江

Rie EGASHIRA

国際共生教育講座

(平成23年9月30日受理)

I

2010年はMark Twainの没後100年にあたり、アメリカ文学関係の学会ではこれを記念したシンポジウムが数多く開催された。その中で中心となった話題の一つに、トウェイン自身の口述による自伝のすべてが死後100年を経て、刊行されることになったということがある。1909年三女Jeanの死についての記述をして最後の章を書き上げ、トウェインは「仕事は終わった」と宣言した。そのあたりの事情について、自伝完全版第一巻である*Autobiography of Mark Twain – The Complete and Authoritative Edition Volume 1*の中で主任編集者であるHarriet Elinor Smithは次のように述べている。

He declared the work done, but insisted that it should not be published in its entirety until a hundred years after his death, which occurred less than four months later, on 21 April 1910.(1)

彼は仕事の終わりを宣言したが、死後100年を経るまでは完全な形で出版されるべきではないと主張した。彼の死は、それから4か月もたたない1910年4月21日のことであった。

トウェインの自伝は全3巻の予定で、今後残りの2巻が綿密な編集作業を経て発刊されるという。100年間自伝完全版の発行を禁じた理由については、たとえば100年たてば、その中で書かれている人々が亡くなるので、彼らを傷つけることがなくなるとトウェインが考えていたからだなどと諸説あるが、このあたりの事情も今後の2巻発行の編集の過程でさらに明らかになっていくであろう。トウェインは19世紀のアメリカにおいて国民的作家“National Novelist”と呼ばれ、そして死後100年を経た今、まさに旬の作家である。トウェインの作品を死後100年の現代から考えるときに、彼が死の間にイメージした100年という時間は何を意味するのだろうか。*Adventures of Huckleberry Finn*は、作中のniggerという言葉にslaveに置き換えたテキストが2011年に発行されるなど、今なお様々な観点からの論争が盛んに行われている作品である。その作品について考えるとき、まずはこれらに関する批評の原点に戻ってそこから、トウェインにとっての時間の意味を考えるのが本論文の趣旨である。

II

『ハuckleberry・フィンの冒険』を巡る議論の中でもっとも有名なものの一つは、第31章でのハックの決意、すなわち逃亡奴隷のジムを救うために「地獄に落ちる」“All right, then, I'll go to hell” (223) 以後、作品の展開がどたばた劇になったがために作品全体の雰囲気台無しになったという論争である。Ernest Hemingwayはこの本を称して、“All modern American literature comes from one book by Mark Twain called *Huckleberry Finn*.... it's the best book we've had. All American writing comes from that” (29). 「あ

らゆる近代アメリカ文学は、マーク・トウェインの『ハック・フィン』から始まる。…それは私たちが持っている最上の本である。」と絶賛している。しかしこれに続く部分で、“If you read it you must stop where the Nigger Jim is stolen from the boys. That is the real end. The rest is just cheating” (29). 「黒人のジムが盗まれたところでこの本をやめるべきだった。それが本当の終わりだ。それ以降はペテンだ。」と記している。この言葉は非常に重く、この問題を抜きにしてこの本を語ることができないのもまた事実である。この問題に関しては、次の3人の批評が代表的なものである。

T. S. Eliot は以下のように述べている。

But it is right that the mood of the end of the book should bring us back to that of the beginning.... So what seems to be the rightness, of reverting at the end of the book to the mood of *Tom Sawyer*, was perhaps unconscious art. For Huckleberry Finn, neither a tragic nor a happy ending would be suitable.... Huck Finn must come from nowhere and be bound for nowhere.... He has no beginning and no end.... Like Huckleberry Fin, the River itself has no beginning or end. In its beginning, it is not yet the River; in its end, it is no longer the River. (334-35)

本の最後のムードが本の最初のムードに戻るの正しいことである。…本の最後に『トム・ソーヤーの冒険』のムードに戻っていくことの正当性は、無意識の技である。というのもハック・フィンには喜劇も悲劇も似つかわしくない。…ハックはどこでもない場所から来て、どこでもない場所へと帰っていかねばならない。…彼には始めも終わりもないのである。…ハックと同じように、ミシシッピ河にも始めも終わりもない。始まりは河ではなく、終わりはもはや河ではない。

後半の河についての記述は少々こじつけの感じがあるが、批評の前半の部分、「ハックはどこでもない場所から来て、どこでもない場所へと帰っていく」という箇所は、円環のイメージを想起させる。“What we call the beginning is often the end / And to make an end is to make a beginning (2291)” 「私たちが始まりと呼ぶところはしばしば終わりである。そして終わりを作るとは、始まりを作ることである」という円環の思想を持つエリオットならではの意見である。

Lionel Trilling も 32 章以降について肯定的な意見を述べる。

Huckleberry Finn is a great book because it is about a god....

Huck himself is the servant of the river-god, and he comes very close to being aware of the divine nature of the being he serves.... It is a rather mechanical development of an idea, and yet some device is needed to permit Huck to return to his anonymity, to give up the role of hero, to fall into the background which he prefers, for he is modest in all things and could not well endure the attention and glamour which attend a hero at a book's end. For this purpose nothing could serve better than the mind of Tom Sawyer with its literary furnishings, its conscious romantic desire for experience and the hero's part, and its ingenious schematization of life to achieve that aim. (320-26)

『ハック・フィン』は神について書いてあるからこそ偉大な本である。…ハックは河の神の召使であり、仕える存在の本質により近づいていくのである。…ハックを無名な存在、すなわちヒーローの役割を放棄し、彼が好む背景に戻すには何らかの機会的な工夫が必要であった。というのも、彼はすべてに鷹揚であり、本の最後にヒーローに必然の注視や栄光には耐えられないのである。このため、ことばの豊かさ、そして経験とヒーローとしてのロマンティックな欲望を持ったトム・ソーヤーの精神ほど、この目的を遂行するのにふさわしい人物はいないのである。

一方 32 章以降について、Leo Marks は否定的立場を取る。

The return, in the end, to the mood of the beginning therefore means defeat — Huck's defeat; to return to that mood *joyously* is to portray defeat in the guise of victory.... The overriding consideration for them is form — form which seems largely to mean symmetry of structure. (344-45)

本の最後に本の最初のムードに戻ることは敗北である。つまりハックの敗北である。喜んでそのムードに戻ることは、勝利を装った敗北を意味する。エリオットとトリリングはこれを否定する。彼らが重視しすぎていることは物語の構造であり、シンメトリーを意味する構造である。

エリオットが述べる nowhere からやってきて、nowhere へと帰っていくハックは、終点を次の始点と見るエリオットの発想に合致し、彼は『ハック・フィン』を円環の物語と見ていることがわかる。またトリリングの発想も background に「戻す」という円環的な見方をしていると考えられる。河についてエリオットは「河には初めも終わりもない」と述べている。自然科学的に捉えれば河の始まりは、たとえば山肌からの小さな一筋の流れであり、終わりは海へと流入する大きな流れであるはずだ。もちろんミシシッピ河にも始めと終わりはあるはずで、メンフィスのマッドアイランドという巨大なミシシッピ河の模型には、確かに河の始まりの位置は記載されていたことを付け加えておく。

これらの批評家の意見は、いずれも物語を円環的に見ていることになるであろう。実際は直線的に流れる河を始まりも終わりもないと論評するエリオットは、『ハック・フィン』を円環思考で解釈し、32 章以降を正しい終わり方であると結論づける。「本の最後にきて最初に戻るのは敗北だ」と述べるマークスは 32 章以降を失敗だと捕えているが、物語が最初のムードに戻ることは認めている。これら三者の批評に対して、亀井俊介氏は以下のように述べる。

ハック・フィンの成長という重大な問題が、彼らの解釈では見落とされている結果になっている。「おらは地獄に行く」という決心をした少年が、どうして作品の最初と同じ「つつましい」子どもであってよく、また最初と同じ「情感ムード」に引き戻されてよいものか。それでは、この作品の内容の展開すべての意味が否定されることになってしまうのではないか。(382-83)

亀井氏はハック・フィンの物語が 32 章以降で最初に戻ることを否定している。私は、氏の考えに同意し、やはりこの物語を円環的に捉えることはできない。ハック・フィンの物語が円環的か直線的かという点は、実に大きな問題をはらんでいる。この点に関して、次章において、解釈の一つの可能性を示唆する。

III

そもそも円環思考と直線思考とはいかなるものであろうか。これらの考え方はそれぞれの死生観と直接結び付く。円環思考は輪廻転生を説く東洋的思想にもとづく。この考え方においては、人は死ねば、あの世に行く。そしていつかふたたび別の生き物、あるいは人として生まれ変わり、この世に戻るのである。時間の輪の中で、人はまたどこかの時点で生を得ることも可能なわけで、基本的にはやり直しがきくという思想である。

一方直線思考は、西洋的思想であり、靈魂不滅を説く。人の魂は永久に天国か地獄を生きる。そもそも人はこの地上においては、生まれながらの罪を贖うべく、よき生き方をすることを目指す。人は生に終わりを告げるときに、最後の審判の場で神によって決定を下され、その魂が天国か地獄に行くわけである。またこの直線思考においては、時間は始点から終点へと直線的に流れており、始まりと終わりがある。人類史はアダムとイブに始まり、人はそこから直線的に流れてきたのである。そしてその終わりは実は見えないずっと先にあるもので、結果的に人は不滅の魂として流れ続けていくわけである。

ミシシッピ河を科学的に解釈すれば、もちろん始めと終わりがある。しかしながら、エリオットは河に始まりも終わりもないという。エリオットの的に解釈すれば、河を下るハックとジムの行動は、始まりも終わ

りもないところをただ漂い、時には地上に上がり苦しい体験をするものの、“there warn’t no home like a raft, after all. Other places do seem so cramped up and smothery, but a raft don’t. You feel mighty free and easy and comfortable on a raft” (134). 「結局のところ、筏のような家はないのだ。他の場所は窮屈で、息が詰まるが、筏の上はそんなことはない。筏の上では自由でのんびりして気楽でいられる。」という認識を得て再び河にもどることの繰り返しということになる。しかし彼らの河をめぐる物語には重要なキーワードがある。それは、“To go along down with the raft” (115) 「筏で河を下る」ことである。これには必然的に直線的イメージを伴うが、状況によってかなり異なる意味を持つ。

「河を下る」ことが強烈に思い出されるのは、90年代に発表された *The Tragedy of Puddin’ head Wilson and the Comedy of Those Extraordinary Twins* の結末部分である。16分の1だけ黒人の血が混じった奴隷女の Roxy は自分の子が白人との間の子供であるにも拘わらず、32分の1の黒人の血が混じっているがゆえに奴隷として生涯を送らなければならないことを不憫に思い、主人の子と自分の子を取り替えてしまう。主人の子として育てられたトムは素行が悪く、拳銃の果てにはおじを殺し、殺人の発覚と同時に奴隷の子であることがばれて、最後にたった1行、“The creditors sold him down the river” (226) 「債権者は彼を河下に売った」という記述で物語が終わるのである。

『ハック・フィン』は、1830年から40年頃のミズーリを舞台に、ミシシッピ河を下ることを小説世界の土台として描かれる。当時の南部において、「河を下る」ことは文字通り河を下ってより深い南部へと入っていくことを示している。そしてそれは深南部と呼ばれる奴隷制度のより厳しい地域へと陥っていくことを意味している。

この物語で「河を下る」きっかけは、まずハックに訪れる。第7章、Widow Douglas と Miss Watson のもとに引き取られていたハックは、*The Adventures of Tom Sawyer* の中で遭遇した事件で得た彼の大金を得ようと企む浮浪者の父のもとに無理やり連れ戻される。親父はひどい飲んだくれで、酔っ払っては繰り返される暴力にハックは痛めつけられている。彼はある時カヌーが流れてきたのを見てとっさにこう考えた。

It was a drift-canoe, sure enough, and I clumb in and paddled her ashore.... I judged I’d hide her good, and then, stead of taking to the woods when I run off, I’d go down the river about fifty mile and camp in one place for good, and not have such a rough time tramping on foot. (43)

それは、確かに、流れてきたカヌーであった。…おれはそれに這い登り、岸辺へと漕ぎ着けた。おれはだれにもわからないようにカヌーを隠しておこうと判断した。逃げる時には、森の中へ逃げ込まないで、このカヌーに乗って河を50マイルも下って行って、決まった場所に住みつこう。そうすればつらい思いをしながら、歩き回らなくてもすむ。

ハックにとって、逃げるということはすなわちカヌーで逃げることであり、動力がないカヌーを逃亡の道具とするためには、「河を下る」ことしかないのである。

カヌーで河の中州にある無人島の Jackson’s Island へと逃げたハックは、そこで思いもかけない人物と遭遇する。ミス・ワトソンの奴隷ジムが、焚火に頭をつっこみそうなほど疲れて眠っていたのである。ハックとの再会を喜ぶジムであるが、ここへ来た理由については、“Maybe I better not tell” (54). 「たぶんおれは言わないほうがいい。」と言う。ハックがだれにも言わないことを約束して、ようやくジムが語った状況は以下のようなものであった。

Well, you see, it ‘uz dis way. Ole Missus — dat’s Miss Watson — she pecks on me all the time, en treats me pooty rough, but she awluz said she wouldn’t sell me down to Orleans. But I noticed dey wuz a nigger trader roun’ de place considable, lately, en I begin to git oneasy. Well, one night I creeps to de do’, pooty late, en de do’ warn’t quite shet, en I hear ole missus tell de widder she gwyne to sell me down to Orleans, but she didn’t want to, but she could git eight hund’d dollars for me, en it ‘uz sich a big stack o’ money she couldn’t resis’. De widder she try to git her to say she wouldn’t do it, but I never waited to hear de res’. I lit out mighty

quick, I tell you.... I see light a-comin' roun' de p'int, bymeby, so I wade' in en shove' a log ahead o' me, en swum more'n half-way acrost de river, en got in 'mongstde drift-wood, en kep' my head down low, en kinder swum agin de curret tell de raff come along.... I'd be twenty-five mile down de river.... I slid overboard, en struck out fer de islan'. (55-56)

ミス・ワトソンはおれをいじめまわして、とてもひどいことをする。でもこれまでは、おれを河下のニュー・オーリンズに売らないと言っていた。でもついこのあいだ、奴隷商人がやって来ていることにおれは気がついた。それで心配になってきて、ある晩ずっと遅くにこっそりと戸口に言ってみたら、ミス・ワトソンがダグラス未亡人におれをニュー・オーリンズに売るつもりだと言っているのを聞いたんだ。売りたいはないんだけど、800ドルで売れると。それは彼女が断りきれないくらいすごい金額だ。未亡人は彼女にそんなことはしないと云わせようとしていたんだけど、おれは残りの部分を聞けなかった。…おれは河に飛び込んで丸太につかまった。…25マイルも河を下っていると思っていたんだが。…おれはこっそり抜け出して、この島に向かって泳ぎだしたんだ。

ジムが逃げるための手段は河を用いることである。彼は丸太につかまり河を下って、その後筏を盗んで逃げようと考えたものの失敗して、結局はジャクソン島へと泳ぎ着きハックと再会したというわけである。ジムにとって「河を下る」ことは、一步間違えばより困難な状況へと自らを追い込むことになるが、地上での逃亡が難しいことを考えると、彼の目指した方法もやむを得なかった。すでに述べた『間抜けウィルソン』のトムの場合と同じく、結果的に「河を下る」あるいは「河を下らざるを得ない」ことが、より奴隷制の厳しい地域へと彼らを陥らせるという悲劇的な要素を持っている。

ハックとジムの目指す「河を下る」その先にある目標は、「とにかく逃亡を成功させる」ということで一致していたものの、結果は彼らの希望と大きく異なるものとなった。ジャクソン島で追手が迫っていることに気付いた2人はひとまずカヌーに乗って、ふたたび河の流れに乗る。殺されたふうを装って逃げたハックについては、搜索に来た人々に途中見つからなかった点に注目すると、一応父親からの逃亡は成功したと言える。あとは当初の彼の計画通り、できれば50マイル程度河を下ってどこか適当な場所に住みつくだけであつた。ところが逃亡奴隷のジムと一緒にになったことで、追手を避けてカヌーに再び乗り、その後流れてきた筏に乗り換える羽目になった。この段階で2人の計画のとりあえずの先にあるものは、ジムの計画に従って河を下り、Cairo まで行くことであつた。ケイロでジムの予定したとおり筏を降りて蒸気船に乗り換えることができれば、ジムもオハイオ河を遡り、自由州へとたどり着けたかも知れない。ハックがその後の“conscience”「良心」の危機を経験することもなかったはずである。

ケイロを間近にしたジムが、奴隷廃止論者に頼んで自分の子供を盗む話を楽しげにするのを聞いたハックは、自分には何も悪いことをしていないミス・ワトソンの所有物である奴隷を逃がす手伝いをしていることに大きな良心の危機を体験する。ジムが逃げる手伝いをするのをやめるべきではないか、31章へと続くハックの良心の苦悩はここから始まった。この場面は第16章で出てくるわけだが、実はその直前の15章でハックはすでに良心の危機を体験している。

霧の中ではぐれたハックとジムであるが、ジムはハックのことを叫び疲れて筏の上で眠っている。一方ハックは筏に乗り移った時、再会できたことを大喜びするジムに対して、“What's the matter with you, Jim? You been drinking?” (93)「どうしたんだい？おまえ、酔っ払っていたのかい？」と霧の中ではぐれたことなど、何もなかったかのようにジムのからかう。最初は騙されていたジムだが、筏にひっかかった木くずを見て、“all you wuz thinkin' 'bout wuz how you could make a fool uv ole Jim wid a lie. Dat truck dah is trash;” (95)「友達に恥をかかせるような奴は人間の屑だ。Trash だ。」と非難する。ハックはその言葉で自己の行いを悔いジムに謝る訳だが、ここにトウエインの仕掛けた重要なトリックが隠されているわけである。ハックはこの章の最後で以下のように告白する。“It was fifteen minutes before I could work myself up to go and humble myself to a nigger — but I done it, and I warn't ever sorry for it afterwards, neither” (95)。「おれは黒人に謝るのに15分かかったがやってのけた。しかもその後誤ったことを後悔したことは一度もない。」これが、トウエインの人種差別に対する姿勢の曖昧さを示している箇所の一つであると言える。黒人奴隷に謝るのに15分かかったがそれでもやってのけたということばは、表面的には差別

的であると取れるのだが、David L. Smith が述べる “Twain adopts a strategy of subversion in his attack on race” (364). 「トウェインは人種に関する攻撃の中で、転覆のストラテジーを用いている」という考えがトウェイン批評の最近の傾向の一つである。つまり差別的な状況を描くことで、逆に差別の悲惨さを訴えているということである。

このように、河を下ること、すなわち直線的流れの中で、ハックは父親から逃げることに成功し、良心の危機や黒人奴隷への新たな意識の獲得を体験する訳である。ハックの物語がイニシエーション・ストーリーであると言われるゆえんである。一方、ジムにとっては河を下ること、すなわちその直線的流れはケイロまでは希望へとつながっていたのであるが、ケイロでの上陸に失敗したとき、「河下へ下ること」はそのまま悲劇へとつながるしかなくなったのである。その後2人は、川岸での宿根事件や王様と侯爵と名乗るペテン師の乗船まで許して、一体どこへ向かって下っていくのか、先の見えない流れの中に陥っていく。その流れが第31章で止まる。

31章において、ジムが王様と侯爵によってより河下の Phelps 農場にたった40ドルで売られたことを知った時、ハックは15章、16章の良心の苦悩を超えたはるかに大きな決意をする。奴隷のジムのことをミス・ワトソンに知らせる手紙を書き、あとはこれを投函するだけになったハックは、それまでのジムの自分への思いやりをことごとく思い出し、逃亡奴隷を助けることを決意する。そして「よしそれなら地獄に行こう。」と手紙を破り捨て、あとはひたすらフェルプス農場へと向かう訳である。川岸での事件に2人は時々巻き込まれるが、常に2人の行動の基点は河の流れとともにあり、すなわちそれは河を下ることと結びついていた。ケイロを通り過ぎてしまい、2人にとってこれ以上河を下ってその後どのような希望が見出せるのか、読者がどきどきしながら物語を読み進んできた第31章に、トウェインはこの一つの転換点を用意した。第32章から42章においては、トムが現れ Sally 叔母さんには Sid と名前を偽って、囚われの黒人奴隷を助けるにはこれぐらいの極端なことをしないと面白くないと、困難なたくらみを思いめぐらすわけである。その挙句、トム自身も最後には鉄砲弾をふくらはぎに受けて負傷する。

トムは本来策略好きで目立ちたがりの「見せびらかし」キャラクターである。その彼が32章から42章にかけてすべての計画を企てていることで、それまでのハックとジムの2人の関係のバランスは崩れる。32章以降に築かれる3人の関係は確かに指揮者トムの下にハックとジムの2人が従う構造となっている。さらにはサリー叔母さんもその枠組みの中に入ってきて、ハックとジムの二者の関係を基本として直線的流れの中で構成されてきた物語は、河から岸に上がったこと、人間関係が複雑にいびつになってきたことで、直線的構造から乖離したように見える。そうであるならば、この物語はエリオットの考える円環の形態をとり、その観点から31章以降の有効性が説かれるべきなのであろうか。

すでに述べたように、直線思考を西洋的、キリスト教的思考、円環思考を東洋的思考と一応分類した。これまで分析してきたように『ハック・フィン』の物語は、31章までは直線思考で語られてきたと考えられる。32章以降は河岸の物語に転換したことから、河の流れに乗った物語であるとは言い難い。それでは物語世界はここから急に円環的物語に変容したのか。

フェルプス農場で流れはいったん止まったのである。河下へと流れ下り続けることに大きな矛盾を抱えていた物語は、ここでいったん行き詰まった。「河を下る」ことを続ける限り、ハックとジムの冒険には終わりが無い。トウェインは実は最初からすべてのプランを立てて物語を組み立てるタイプの作家ではない。彼の執筆ノートには、題材が尽きた時はいったんそれを放っておいてしばらくしてから取り組めば、またタンクの水が湧いてくると述べている。ケイロを通り過ぎ、自由への希望をこの河下への流れの中で見出せなくなった作家は、第31章のハックの新たな決意によってその流れを断ち切った。さらに2人をフェルプス農場にとどまらせて次へのプロットを練り、ついにミス・ワトソンが死ぬ間際にジムを自由にしていたというかなりの荒業を使って10章あまりの救出劇に始末をつけた。静止した状態のどたばた劇は、この隠し技によって時間的にはミス・ワトソンの死んだ過去の時点へも逆行し、われわれ読者はその過去の時点から時間軸の直線の物語を行きつ戻りつという感覚を体験する。

西洋的直線思考の中では、霊魂は不滅であり、「始まり」があり永久の先の「終わり」がある。これは実は死後の世界の無を説くトウェインの思想とは大きく隔たたる。かれは自らの手紙の中で死後の向こうの無の状態、annihilation を次のように述べる。

I have long ago lost my belief in immortality — also my interest in it.... I have sampled this life and it is sufficient.... Annihilation has no terrors for me, because I have already tried it before I was born.... There was a peace, a serenity, an absence of care, grief, perplexity: and the presence of a deep content and unbroken satisfaction in that hundred million years of holiday which I look back upon with a tender longing and with a grateful desire to resume, when the opportunity comes. (Neider 249)

私は不死を信じることに興味はとうの昔に捨ててしまった。…私はこの世を試しに生きてきて、それで十分である。無の状態は私にとって恐怖ではない。なぜなら私はすでに生まれる前にそれを試したことがあるのだ。…そこには平和と清廉さがあり、心配事も嘆きも迷いもなかった。何百万年にもわたる休日の中に、深い安心と破られることのない満足感があった。時が来れば再び戻りたいという穏やかな憧れと感謝の願いで、そこを振り返る。

これによれば、『ハック・フィン』の物語を直線の物語と解釈することは難しいように思われる。しかし、トウェインは死後の世界の存在について、とにかく悩んでいたのだ。それはたとえば娘 Clara が父親について語った次のことばの中にもはっきりと表れている。“He never shut up his mind so tight that it would not unfold to the possible mysteries of an invisible world.... Sometimes he believed that death ended everything, but most of the time he felt sure of a life beyond” (304). 「彼は目に見えない世界についての可能なミステリーに対して、心を開くことがないほど頑なには、決して心を閉ざさなかった。時々彼は、死はすべてを終わらせると信じていたが、たいてい彼は死後の世界を確信していた。」トウェインの死後の世界に対する迷いは、トウェインの人生観に大きな影響を及ぼしている。トウェインの宗教に対する姿勢はしばしば語られる神への辛辣さから見ると一見否定的であると言える。しかし彼が作品や講演で語る神についての話は皮肉ばかりでもない。彼はとにかく迷っていたし、その迷いは亡くなるまで続いた。

その迷いを踏まえてさらに作品を考察し、特に“annihilation”ということばに注目するならば、彼の世界観は東洋的発想に近いものも持つと解釈できうであろう。私は、あくまでこの物語は直線の物語と考える。そもそも最後の10章あまりを無名の存在に戻すというエリオットの解釈は正しいのであろうか。物語の冒頭を確認しよう。“You don’t know about me, without you have read a book by the name of ‘The Adventures of Tom Sawyer,’ but that ain’t no matter. That book was made by Mr. Mark Twain, and he told the truth, mainly” (13). 「みんなが『トム・ソーヤーの冒険』を読んだことがないのなら、おれのことを知らないだろう。そんなことはどうでもいい。その本はマーク・トウェインという人が書いたもので、だいたいありのままのことを言っている。」

この物語はすべて1人称で語られる。そのために、ハックルベリー・フィンという名前は冒頭どこにも出てこない。出てくるのは1人称のIのみである。もちろん読者は物語のタイトルからこれがハックルベリー・フィンの物語であることは知っているし、それも『トム・ソーヤーの冒険』とは異なった定冠詞のTheのつかない物語であるから、『トム・ソーヤー』とくらべると冒険のその範囲は広いのかもしれないと思うかもしれない。ハックルベリー・フィンという名前が物語の中で提示されるのは、同じく第1章の後半綴り字書きのエピソードでミス・ワトソンが“Don’t put your feet up there, Huckleberry;” (15)「ハックルベリー、そこに足を上げてはいけません。」と説教する箇所である。ミス・ワトソンは「ハックルベリー」とこの場面で3度呼びかける。第2章においても、家族のいるものしかトムの空想上の盗賊団には入れないことが問題になったとき、友人から“Here’s Huck Finn, he hain’t got no family” (21)「ハック・フィンには家族がない」と名指しされる。つまりハックは自らが「おれはハックルベリー・フィンだ」と名乗りを上げることはない。読者はハックという名前の男の子の本質を、物語を読み進めながら理解していく。エリオットが物語の最初の無名の存在にこだわるのは、「おれのことを知らないだろう、そんなことはどうでもいい。」という箇所にこだわってのことであると考えられるが、ハックのキャラクターの肉付けは河を下るその流れの中で徐々に行われ、それは31章まではもちろんのこと、32章以降でもトムの計画を批判しているハックの中で一貫して行われていると考えられる。Lawrence Howe が述べる“when Tom arrives to relieve Huck’s loneliness and to whip up the sagging narrative momentum, Huck is reactivated and recommitted to his goal of Jim’s freedom” (95). 「トムが彼の孤独を癒し、沈下していた勢いを盛り返させるためにやってき

たとき、ハックはジムを自由にするための目的を再度勢いづけることができたのである。」という考えも納得がいく。ハックの無名性については、彼の人間の本質は徐々に読者に提示されるものの、1人称の語りであることが大いに影響しており、他人からの名指しでハックという名前とキャラクターを読者に認識させる手法が取られているのである。ハックは物語全体を通して、無名であり続けたとも言える訳である。『トム・ソーヤーの冒険』が3人称で語られ、冒頭部分で“‘Tom!’ No answer. ‘Tom!’ No answer. ‘What’s gone with that boy, I wonder? You Tom!’ No answer” (I). 「『トム』、答えがない。『トム』、答えがない。この子はどうしたのかしら。『トム』、答えがない。」と最初からトムの名前とキャラクターの特徴が読者に提示され、トム少年として最初から明示されていることとは大きく異なるのである。

IV

直線的流れの中で物語を描いたトウェインは、物語の終着点をおどろくべき結末とした。最終章、物語の結末部分で、トウェインはハックに“I reckon I got to light out for the Territory ahead of the rest” (296) 「誰よりも先にインディアンのテリトリーに向かわなくてはならない」決意をさせたのである。この部分からも『ハックルベリー・フィンの冒険』は円環の物語でなく、直線の物語、しかもまだまだ続く先を想定した直線的思考をトウェインが目指していたことは間違いがないと言える。ただし物語の場に注目すれば、「河を下る」流れがここでいったん止まり、西のテリトリーへ向かう方向転換を示していることは実に興味深い。こののちのトウェインの作品は、『間抜けウィルソン』のように従来型の「河を下ること」を取り扱ったものがある一方で、*A Connecticut Yankee in King Arthur’s Court* のように6世紀のイギリスへのタイムトリップを取り扱ったもの、“No.44, The Mysterious Stranger” のようにヨーロッパを取り扱ったものがあるなど、トウェイン自身が時間と場所を行ったり来たりしている印象である。しかしいずれの作品を見てもやはり円環的物語ではなく、トウェインは結末を提示し物語の終わりに何らかの答えを示していると私は考える。“Annihilation” 「無」を自らの生きる信条とするトウェインであるが、消え去ることこそが彼の人生観と見るならば、終わりは決して始まりではないのである。

引用文献

- Clemens, Clara. *My Father, Mark Twain*. New York: Harper, 1931.
- Clemens, Samuel Langhorne. *Adventures of Huckleberry Finn: An Authoritative Text Backgrounds and Sources Criticism*. Ed. Thomas Cooley. 3rd ed. New York: W.W. Norton & Company, 1999.
- Eliot, T. S.. “An Introduction to Huckleberry Finn.” Clemens, Samuel Langhorne. *Adventures of Huckleberry Finn: An Authoritative Text Backgrounds and Sources Criticism*. Ed. Sculley Bradley. 2nd ed. New York: W.W. Norton & Company, 1977. 328-35.
- . “Four Quartets”, *The Norton Anthology of English Literature*, 4th ed. Ed. M. H. Abrams. Vol. 2. New York: W.W. Norton & Company, 1979. 2286-92.
- Hemingway, Ernest. *Green Hills of Africa*. 1936. London: Jonathan Cape Thirty Bedford Square, 1954.
- Howe, Lawrence. *Mark Twain and the Novel – The Double-Cross of Authority*. New York: Cambridge UP, 1998.
- Marks, Leo. “Mr. Eliot, Mr. Trilling and Huckleberry Finn.” *A Norton Critical Edition*, 2nd ed. 336-49.
- Trilling, Lionel. “The Greatness of Huckleberry Finn.” *A Norton Critical Edition*, 2nd ed. 318-28.
- Twain, Mark. *The Adventures of Tom Sawyer. The Writings of Mark Twain*. Vol.Ⅷ. 1922. Tokyo: Honno Tomosha, 1988.
- . *Autobiography of Mark Twain*. Ed. Harriet Elinor Smith. *The Complete and Authoritative Edition*. Vol.1. Berkeley: Univ. of California P, 2010.
- . *The Autobiography of Mark Twain*. Ed. Charles Neider. London: Chatto & Windus, 1960.
- 亀井俊介 『マーク・トウェインの世界－亀井俊介の仕事4』 東京 南雲堂 1995年